

＜第3回三郷市在宅医療・介護多職種連携研修プログラム検討委員会資料＞

研修プログラムの効果 —アンケート調査による分析—

2018年2月8日
埼玉県立大学プロジェクトチーム

【概要】

- 研修の実施により期待された効果は、次のとおりであった。
 - ① 在宅医療・介護において、多職種連携を行うことの必要性を理解できるようになる、
 - ② 自職種の強み、他職種の役割・機能を理解し、地域の課題の解決のため、それを活かすことのメリットを理解できるようになる、
 - ③ 今回の研修の契機として、同じ地域の多職種間で顔見知りとなり、気軽に連絡を取れる関係を構築できるようになる、
 - ④ 専門職間の心理的な距離を縮め、率直に話をすることの重要性を理解できるようになる、
 - ⑤ 三郷市における多職種連携に関する様々な課題について、研修後においても、自律的・継続的に取り組んでいく意識が醸成される、

- アンケート調査の分析結果からは、今回の研修では、概ねこのような効果が得られたと評価することが可能であり、課題抽出のためのヒアリングから研修会の開催に至る一連の研修プログラムは、多職種連携に関する専門職の意識改革に有効であると判断することができる。

1. 研修会参加者の概要

研修会の開催に当たり、関係団体を通じて参加者を募ったところ、参加を希望する者が予想以上に多く、申込者は78名となったため、グループ数を11とした。第1回研修会の出席者は次のとおりであったが、2名が欠席したため、76名となった。また、第2回研修会の出席者は73名であった。

<参加者の職種> ※回答者75名

職種（医療職）	人数（人）	職種（医療職以外）	人数（人）
医師	8	介護福祉士・訪問介護員	9
歯科医師	5	ケアマネジャー	11
薬剤師	7	病院の医療相談員	6
訪問看護師	7	地域包括支援センター職員	9
理学療法士	5	介護施設職員	1
作業療法士	4		
言語聴覚士	1		
柔道整復師	2		

- *1 介護支援専門員有資格者1名 *2 社会福祉士有資格者5名
 *3 主任介護支援専門員2名、社会福祉士3名、保健師1名（重複あり）

<参加者の年齢>

年代	人数(人)	割合(%)
20歳代	6	8.1
30歳代	23	31.1
40歳代	25	33.8
50歳代	8	10.8
60歳代以上	12	16.2
計	74	100

<参加者の在宅医療・介護経験年数>

経験年数	人数(人)	割合(%)
5年未満	21	28.8
5年以上10年未満	14	19.2
10年以上15年未満	17	23.2
15年以上	21	28.8
計	73	100

2. 「研修満足度」に関する調査

研修会に対する参加者の満足度については、下記のとおりであり、第1回、第2回とも概ね満足できる結果であったと考えることができる。

○ 第1回研修会終了後の調査の8つの設問のうち、7つの設問では、ほとんどの参加者が「とてもそう思う」又は「そう思う」と回答した。第2回研修会においても、同様の傾向が見られた。

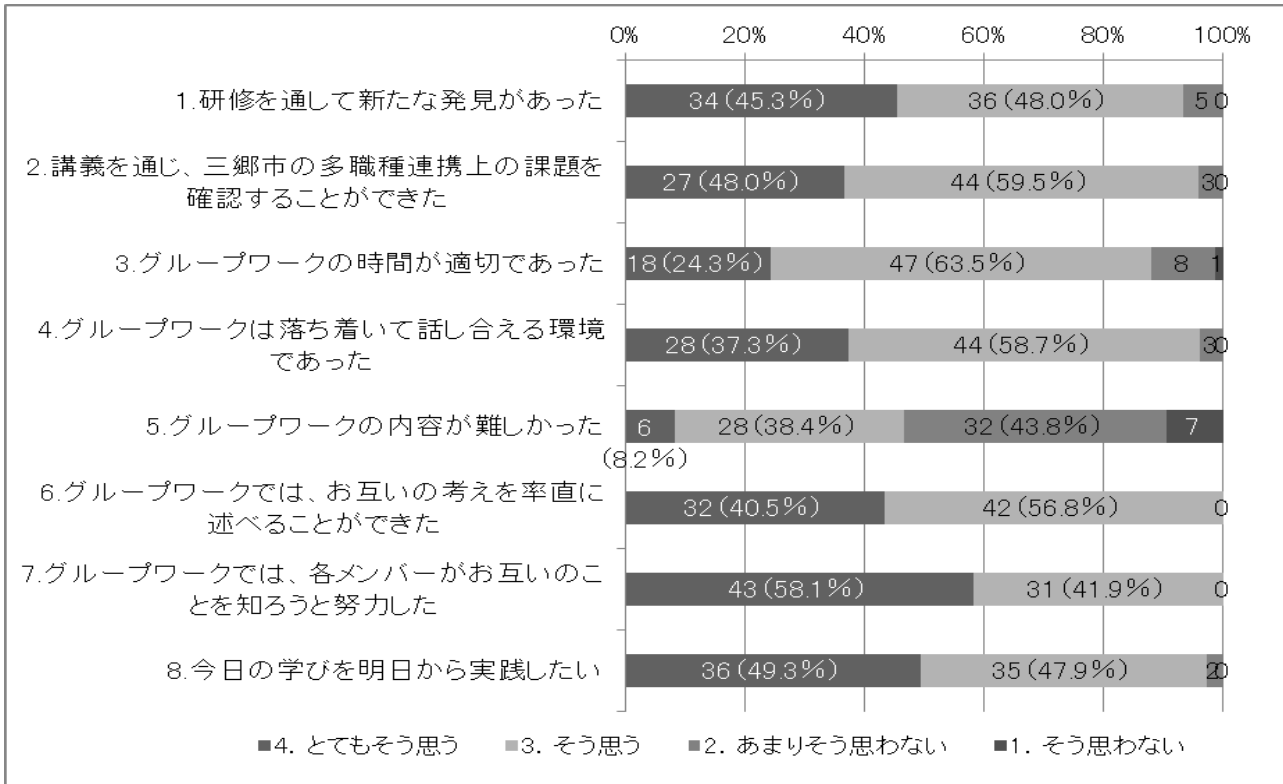
1. 研修を通して新たな発見があった
2. 講義を通じ、三郷市の多職種連携上の課題を確認することができた
3. グループワークの時間が適切であった
4. グループワークは落ち着いて話し合える環境であった
6. グループワークでは、お互いの考えを率直に述べることもできた
7. グループワークでは、各メンバーがお互いのことを知ろうと努力した
8. 今日の学びを明日から実践したい など

○ 「5. グループワークの内容が難しかった」については、第1回研修会では、47%の参加者が「とてもそう思う」又は「そう思う」と回答したが、第2回研修会では、28%に減少した。

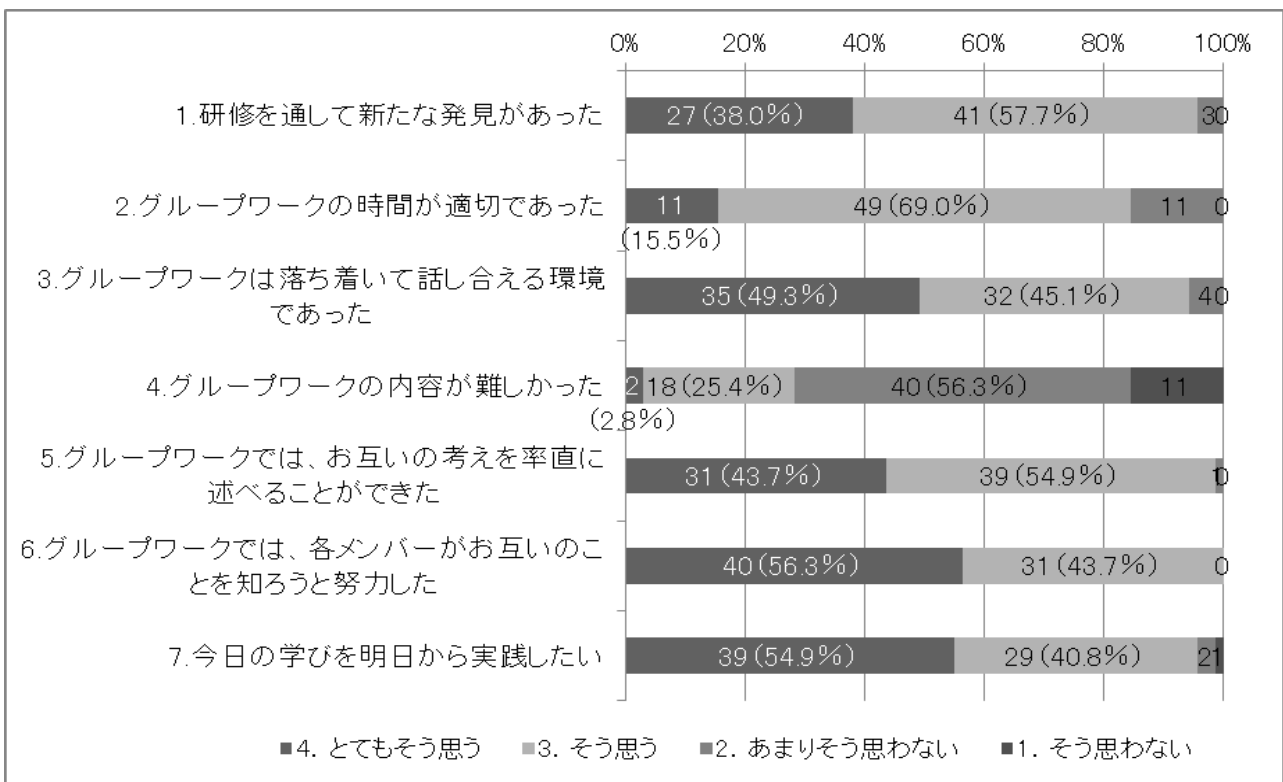
これは、今回のグループワークがいわゆる「事例検討会」ではなく、多職種連携がうまく行くためのポイントといった視点から行ったものであったため、慣れるまでの間、戸惑いなどがあった可能性がある。

これについては、グループワークの方法の説明、時間の設定等に更に検討の余地があることを示している。

<第1回研修会> 参加者 76名 調査票回答者 75名 回収率 98.7%



<第2回研修会> 参加者 73名 調査票回答者 71名 回収率 97.3%



3. 「多職種が連携した実践に対する気持ちや行動の変化」に関する調査

① 調査対象者の概要

- ・ 2回とも研修会に参加し、アンケート調査に回答した68人を対象とした（回収率 89.5%）
- ・ 回答者については、現在従事している職種で分類している。

<回答者の職種> ※医療職 33人 医療職以外 35人

職種（医療職）	人数（人）	職種（医療職以外）	人数（人）
医師	5	介護福祉士・訪問介護員	9
歯科医師	5	ケアマネジャー	11
薬剤師	7	病院の医療相談員	6
訪問看護師	7	地域包括支援センター職員	9
理学療法士	4		
作業療法士	3		
言語聴覚士	1		
柔道整復師	1		

<回答者の年齢>

年代	人数(人)	割合(%)
20歳代	6	8.8
30歳代	23	33.8
40歳代	21	30.9
50歳代	8	11.8
60歳代以上	9	13.2
(無回答)	1	1.5
計	68	100

<回答者の在宅医療・介護経験年数>

経験年数	人数(人)	割合(%)
5年未満	20	29.4
5年以上10年未満	13	19.1
10年以上15年未満	15	22.1
15年以上	19	27.9
(無回答)	1	1.5
計	68	100

② 研修の前後における参加者の意識の変化

<分析手法>

「期待する効果」が得られたかどうかについては、次の選択肢項目の統計分析の結果、自由記載欄の内容を踏まえ、総合的に判断した。

a. 選択肢項目

- 各設問の回答を、6段階（6. とてもよくあてはまる、5. あてはまる、4. ややあてはまる、3. ややあてはまらない、2. あてはまらない、1. まったくあてはまらない）で点数化した。
ただし、逆転項目は処理した上で計算した。つまり、質問の仕方によって、意識が向上する方向が6ではなく、1となる場合があるが、そのような設問については、結果の見やすさを考慮し、1～6の番号を逆に置き換えた。
- 設問項目ごとにウィルコクソン（Wilcoxon）の符号付順位検定により、研修の前後において参加者の意識に変化が生じたどうか、また、設問項目を「期待する効果」ごとに割り当てた上で合計し、「期待する効果」に関する変化を分析した。

【「期待する効果」に割り当てた設問】

- ① 在宅医療・介護において、多職種連携を行うことの必要性を理解できるようになる
（設問）1, 2, 3, 4, 5 計5項目
- ② 自職種の強み、他職種の役割・機能を理解し、地域の課題の解決のため、それを活かすことのメリットを理解できるようになる
（設問）6, 7, 8, 9 計4項目
- ③ 今回の研修の契機として、同じ地域の多職種間で顔見知りとなり、気軽に連絡を取れる関係を構築できるようになる
（設問）10, 11, 12 計3項目
- ④ 専門職間の心理的な距離を縮め、率直に話をすることの重要性を理解できるようになる
（設問）13, 14, 15 計3項目
- ⑤ 三郷市における多職種連携に関する様々な課題について、研修後においても、自律的・継続的に取り組んでいく意識が醸成される
（設問）16, 17 計2項目

b. 自由記載項目

- 自由記載の内容を記載された文章を内容によって分類した。

<分析結果>

- 「期待する効果」のうち、②「自職種の強み、他職種の役割・機能を理解し、地域の課題の解決のため、それを活かすことのメリットを理解できるようになる」に対する回答が研修後において統計的に有意に変化しており、多職種連携に関する意識が向上していることがわかった。

また、②に含まれる下記の4つの設問項目を個々に見ると、それらの回答すべてが有意に変化しており、多職種連携に関する意識が向上していることがわかった。

6. 自職種の強みを他職種に説明できる
7. 在宅医療介護に関わる多職種の役割機能を理解している
8. 在宅医療介護に関わる多職種の役割機能を発揮して地域の課題に取り組んでいる
9. 利用者に関する情報を他の職種と共有し、共通の目標を設定できる

- 他方、①、③、④、⑤については、統計的に有意な変化は認められなかった。ただし、参考までに「得点率」の変化を見ると、③、④において改善に向かう傾向が見られた。

- ①の効果は、「在宅医療・介護において、多職種連携を行うことの必要性を理解できるようになる」ということであるが、回答の平均値は、研修前でも既に5点前後となっている。つまり、対象者が各職種団体から推薦された者であるため、そもそも意識の高い集団であり、研修後においても、回答が大きく変化することはなかったと推察される。

他方、自由記載欄では、多職種連携の必要性・重要性に対するコメントが多数寄せられており、高いレベルで更に意識の向上が図られたことが伺える。

- ③の効果は、「今回の研修の契機として、同じ地域の多職種間で顔見知りとなり、気軽に連絡を取れる関係を構築できるようになる」ということであつたが、設問は、

10. 利用者に関する情報の伝達が困難な時がある
11. 利用者に関する情報の伝達が困難な職種がある
12. 自分が持っている情報を、他の専門職が必要に応じて得られるようにしている

であり、意識の変化にとどまらず、具体的な行動の結果まで求めていた。

これらの設問は、研修参加者が実践者であるため、すぐに行動に移せるのではないかとの考えから設けられたものであつたが、利用者に関する情報伝達の困難さについては、意識の変化だけで改善するものではなく、情報伝達のルールや方法など具体的な改善策が講じられる必要があるため、回答では、有意な変化には至らなかったのではないかと考えられる。

ただし、参考までに平均値の動きを見ると、10及び12の設問では、改善の傾向が見られる。

また、自由記載欄では、顔の見える関係の意義、情報の発信・共有への取組みが記載されており、今後、研修の効果が波及していくことが期待できる。

- ④の効果は、「専門職間の心理的な距離を縮め、率直に話をすることの重要性を理解できるようになる」ということである。

各設問とも有意ではなかったものの、参考までに平均値の動きを見ると、それぞれ改善に向かう傾向が伺われた。また、自由記載には、「連帯意識を感じた」、「ハードルが下がったように感じる」、「コミュニケーションの大事さを改めて知った」などの記載がなされており、意識の変化があつたことが伺える。

○ ⑤の効果は、「三郷市における多職種連携に関する様々な課題について、研修後においても、自律的・継続的に取り組んでいく意識が醸成される」であるが、回答に有意な変化は認められなかった。

この理由としては、設問「16. 三郷市の医療介護に積極的に関わりたい」については、回答の平均値は研修前でも 5.1 点となっており、もともと水準が高いため、回答が大きく変化することはなかったと推察される。

設問「17. 三郷市の医療介護に関わる課題について、多職種が連携することで解決できそうだ」については、有意ではなかったものの、参考までに平均値の動きを見ると、意識の改善傾向が伺える。自由記載では、多職種連携に積極的に取り組みたいという趣旨の記載が多数なされており、今後の実践に期待をすることができると考えられる。

◎ 期待する効果、設問ごとの平均点、有意確率

※平均点が高い方が意識が高い。

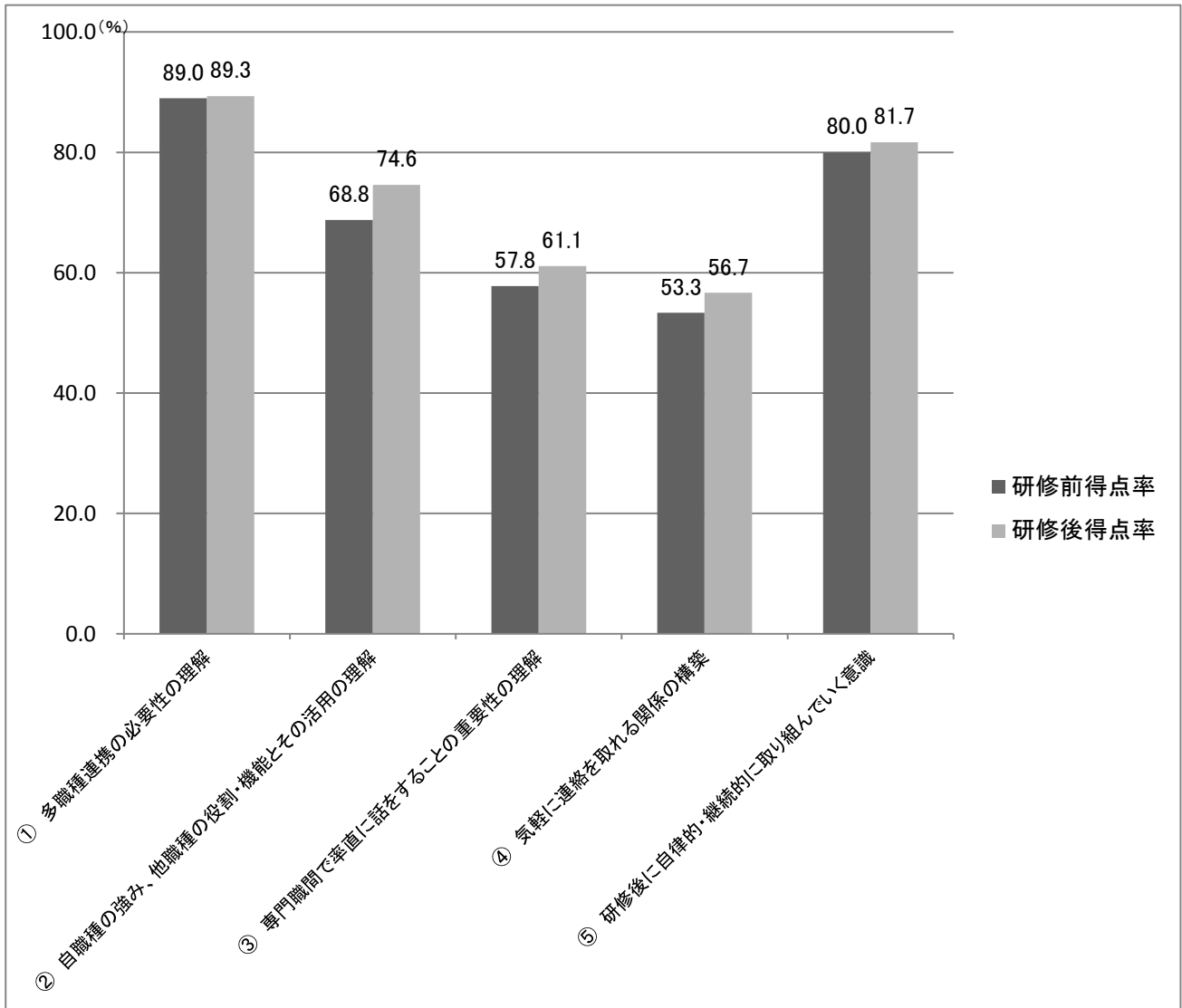
期待する効果 設問	n	研修前 (平均点±標準偏差)	研修後 (平均点±標準偏差)	有意確率 (P)
① 在宅医療・介護において、多職種連携を行うことの必要性を理解できるようになる	68	26.7±2.24	26.8±2.33	0.364
1. 多くの専門職と連携して働くことは自分の援助をより良くすることにつながる	68	5.6±0.58	5.6±0.55	0.868
2. 多くの専門職が連携することは、利用者家族へのより良い援助を提供することにつながる	68	5.7±0.51	5.7±0.51	0.853
3. 多職種で連携することは手間と時間がかかるので、できるだけ自職種で対応する方が良い(逆転項目)	68	5.1±1.02	5.2±1.15	0.270
4. 自職種の求められる役割機能を果たしていれば、他職種と連携する必要はない(逆転項目)	68	5.6±0.63	5.5±1.00	0.701
5. 利用者の幸せを考えることが最優先事項である	68	4.8±1.04	4.9±0.82	0.521
② 自職種の強み、他職種の役割・機能を理解し、地域の課題の解決のため、それを活かすことのメリットを理解できるようになる	67	16.5±2.92	17.9±2.30	0.000*
6. 自職種の強みを他職種に説明できる	68	4.5±0.82	4.9±0.68	0.000*
7. 在宅医療介護に関わる多職種の役割機能を理解している	68	4.2±0.97	4.5±0.70	0.005*
8. 在宅医療介護に関わる多職種の役割機能を発揮して地域の課題に取り組んでいる	67	3.8±1.03	4.2±0.71	0.003*
9. 利用者に関する情報を他の職種と共有し、共通の目標を設定できる	68	4.1±0.93	4.4±0.89	0.005*
③ 今回の研修の契機として、同じ地域の多職種間で顔見知りとなり、気軽に連絡を取れる関係を構築できるようになる	67	9.6±2.25	10.2±1.90	0.172
10. 利用者に関する情報の伝達が困難な時がある(逆転項目)	68	2.7±0.96	2.9±0.99	0.559
11. 利用者に関する情報の伝達が困難な職種がある(逆転項目)	67	2.9±1.00	2.9±0.99	0.863
12. 自分が持っている情報を、他の専門職が必要に応じて得られるようにしている	67	4.1±1.19	4.3±0.89	0.126
④ 専門職間の心理的な距離を縮め、率直に話をすることの重要性を理解できるようになる	67	10.4±2.14	11.0±2.25	0.072
13. 他の専門職が相談しやすいように心がけている	67	4.6±0.90	4.7±0.84	0.373
14. 他の専門職との心理的な距離を感じることがある(逆転項目)	68	2.9±0.96	3.2±0.94	0.211
15. 相談しにくいと感じる他職種がある(逆転項目)	68	2.8±1.07	3.1±1.00	0.147
⑤ 三郷市における多職種連携に関する様々な課題について、研修後においても、自律的・継続的に取り組んでいく意識が醸成される	68	9.6±1.27	9.8±1.50	0.180
16. 三郷市の医療介護連携に積極的に関わりたい	68	5.1±0.72	5.1±0.85	0.605
17. 三郷市の医療介護に関わる課題について、多職種が連携することで解決できそう	68	4.5±0.89	4.7±0.86	0.051

(注) * : 有意水準 P<0.05 を満たす。

◎ 「期待する効果」ごとの得点率の変化

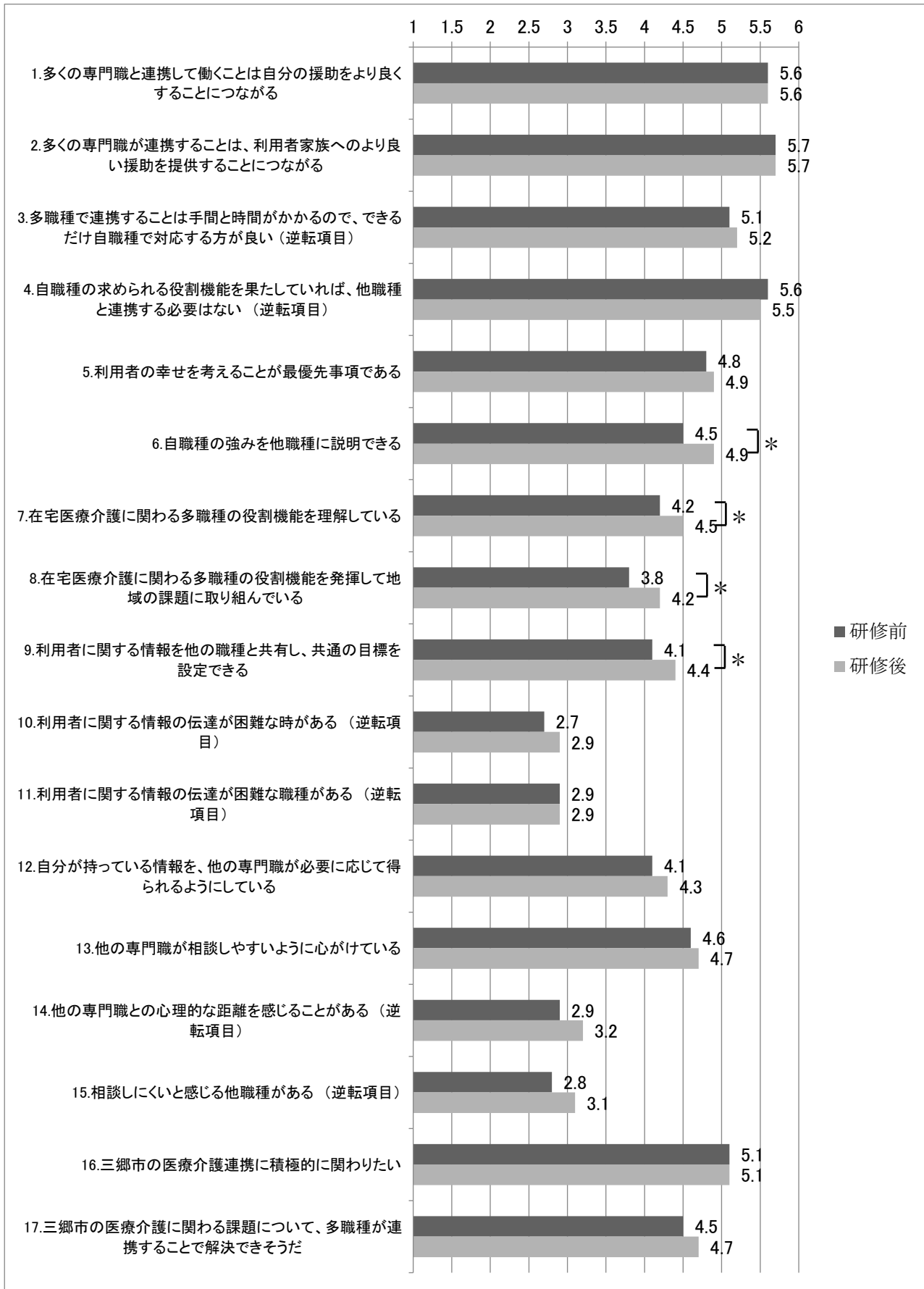
「期待する効果」①～⑤ごとに、設問数に応じて得点率を計算し、図示した。

例) ①の平均点の合計値 26.7 / (設問数 5 × 6)



※ 得点率が高い方が意識が高い。

◎ 設問ごとの研修前後の平均点の比較



(注) 平均点が高い方が意識が高い。

(4) 自由記載の内容

自由記載欄には、55名が記載していた。記載された文章を内容によって分類すると、次のとおりであり、

- ・研修会が顔の見える関係づくりに役立った
- ・他職種に対する理解が進んだ
- ・多職種連携の重要性に対する理解が進んだ
- ・工夫次第で他職種と連携できると思えるようになり、多職種連携に取り組む意欲が湧いてきた
- ・多職種と積極的に連携・情報共有を図っていきたい

といったコメントが多く見られた。

また、研修会のあり方については、プログラムの内容や進め方に意見や提案はあったものの、総じて、このような取組みは有意義であるので今後も継続して欲しいという意見であった。

【顔の見える関係の意義】

- ・地域のコアメンバーが集まって研修できたことは、大変すばらしい。
- ・医師等は忙しく、集めるだけでも難しいと思うが、このような企画は非常にありがたい。
- ・初めて様々な職種と直接会う事ができて、新しい発見があった。
- ・市内の事業所の人たちが顔を合わせるのはいいと思った。
- ・「顔の見える関係」を少しは構築でき、充実したものになった。
- ・今まで連携していなかった他職種の方々と顔を合わせ、良好な関係を築くことができた。
- ・名刺交換し、今後の連携につなげていきたい。
- ・顔の見える関係づくりで具体的に皆さんがどうしているのか知りたい。
- ・顔の見える関係は強い。面倒と感じたり、時間的な余裕がない時でもきちんとした対応をするよう心掛けたい。
- ・多職種連携の重要性について日々感じながら業務に当たっているが、今回の研修で、皆が顔の見える関係を望んでいることを知り、今後は積極的に声を出していきたいと思った。

【他職種への理解】

- ・現場では、意見交換の機会が少ない方も多かったが、この研修を通じて相手を少し理解できた。
- ・知っているようで知らなかったこと、知っていたつもりでいたこと、誤って認識していたことなどに気づくことができた。
- ・他職種も利用者のことを考えて取り組んでいると実感し、連帯意識を感じた。
- ・関わりにくさの壁を超えるため、自らの職種について伝える能力の向上をもっと図っていきたい。
- ・他の専門職の方と交流したことで、どのようなことができるのか具体的に教えてもらうことができ、今後のケースにつなげていけそう。

【多職種連携の重要性の認識、意欲の向上】

- ・自分自身の課題を何となく自覚していたが、明確にできた。
- ・課題を達成できる目標としてあげることができたのはよかった。
- ・多職種の連携の重要性を再認識できた。
- ・個々のケースを大切に、多職種で対応を進めることが重要。
- ・多職種連携に対するハードル（気持ち的な部分も含めて）が下がったように感じる。
- ・グループワークを通して、自分だけでは解決できないことも、皆で意見を出し合うことで良いものができることを感じ、在宅においても皆で力を合わせれば、利用者にとって力強いサポートやより良いサポートができると実感した。

- ・連携は難しいと思っていたが、工夫や努力次第でできると思えるようになった。
- ・これから先、協力しながら利用者のニーズに応えていこうと思った。
- ・この研修は、実践が大事だと思うので、より積極的に多職種と連携、連絡をとり、患者様によりより在宅医療を提供できるようにしたい。
- ・情報の発信が一方通行にならないような工夫も大切だ。
- ・メディカルケアステーションなどのツールを使って情報の共有が広がっていけばいいと思った。
- ・知識を広めるとともに、実践をしていきたい。
- ・コミュニケーション、連携の大事さを改めて知った。明日からの行動が変わる気がする
- ・今後、積極的に連絡を取り合い情報交換・共有を図っていこうと思う。
- ・利用者や家族だけではなく、関係機関についても知った上で対応していくことの大切さ、失敗をしても次へつなげること、起こしたアクションに対し何も起こらなかったとしても、起こしたことに意味があり、次へつなげる可能性があることを忘れずに日々できることをしていこうと思った。

【研修方法に対する意見】

- ・圏域でグループ分けしているので、話しやすかった面もあるが、連携の少ないメンバーとも知り合いたかった。
- ・他の圏域のことも聞きたかった。
- ・病院の参加も、医療側の意見を知るために必要だったと思う。
- ・医療機関は冬場忙しいので、夏場の研修がいい。
- ・実際の患者さんの例を挙げて、問題解決のシミュレーションをしたらよい。
- ・架空であっても事例を通して、多職種の視点や思考に触れる機会があると、脱線もしやすいが、実際の連携に活かすヒントは掴みやすいかと思った。
- ・「行動計画ワークシート」の作成が大変だったようなので、少し早めに集合してまとめてから研修（事前の宿題はなるべくやらない形）でも良いかもしれないと思った。
- ・検討課題に分かりにくい内容があった。
- ・時間に押された。
- ・あらかじめ設定された答え「連携は大事だ」、「見える化が重要だ」に向かわされたような気分で研修の内容としては新鮮味がほとんどなかった点でとても残念だった。

【研修会の継続への要望】

- ・今後とも多職種連携が必要と思われ、また参加したい。
- ・2回目、3回目へとつなげていきたい。
- ・これからも継続的に研修を開催して欲しい。
- ・今後、連携がしやすくなるので、このような研修を負担のない範囲で続けて欲しい。
- ・定期的に行うと、業務に活かせる、三郷市の医療と介護の向上につながると思う。
- ・多職種で同じ研修を受ける機会はまだ少ないため、年に1～2回程度、このような場があると、より良い連携につながるように思う。
- ・メンバーを入れ替えて、今回参加していない方々にも同様の研修を受けてもらい、継続的に開催していくと良いのではないか。
- ・私達は「各職種の代表」ということだが、他のメンバーへの影響がどの程度あがるのか、自分がどこまで与えられるか、こんな研修が小さなグループ単位で市内であればと思う。

【研修企画者への意見】

- ・ 効率化や合理化を求められているような気がした。医療や福祉、介護はすべて対人援助職でありムダなこと、余分を大事にすることが私はとても重要と思っているので、現場が自らもっともっと頑張らなきゃと言わされているようで心苦しい思いがした。
- ・ 連携や共有、相互理解をしようと皆あたり前のようにしている。でも、できないほどの多忙さに日常が包まれているということを、ぜひ制度改正や行政を動かす力を持っている大学の先生たちには理解していただきたい。